うなのなんちゃって創作論

うな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
うなのなんちゃって創作論

【Ｎコード】
Ｎ７２４１Ｙ

【作者名】
うな

【あらすじ】
創作論を気ままに語ります。ご意見があれば遠慮なく書き込んで下さいませ。

第一回　小説を書くのってすごいこと？（前書き）

意見や反論、どしどし応募してます。創作論で語り合いましょう。

第一回　小説を書くのってすごいこと？

うなのなんちゃって創作論第一回。本日は「小説を書くのってすごいこと？」と題しまして創作者の心構え的なところに触れていきたいと思います。

さて。創作歴が長いだけが自慢の私ですが、新しい友人などができると決まって「小説を書いてるなんてすごいね！」と言われます。社交辞令半分にしても、皆が皆同じようなセリフを言うということは「小説書く＝すごい」という一般認識がそこにはあるのではないかと考えてしまいます。

結論から言いますと、小説を書くことは数多ある趣味の一つでしかなく殊に高尚なものではない、というのが私の見解です。いくつか理由を挙げて説明しましょう。

まず第一に小説を書くのには特別な機材もテクニックは必要ありません。紙とペンさえあれば誰にだって書けちゃいますし、推奨される入力デバイスも普通のパソコンで充分すので身近にあることが多いでしょう。

マンガ、アニメ、ゲーム……一方のビジュアル文化は特殊なスキルと投資が必要な場合が多いですね。特に後者２つはマンパワーがかなり必要なジャンルですので、私のような人脈のない人間には非常に手が出しづらい。その点、活字文化である小説はプロですら独力で作品を仕上げることがザラですので、その気になれば誰だって書けてしまいます。要は、非常にコストが低いわけですね。

理由その二。小説は非常に受け皿が大きく、作品の方向性が縛られることが少ない。

マンガ、というとやはりメインストリームは少年漫画でしょう。最近になって社会派作品も取り上げられる機会が増えてきましたが、やはり王道はジャンプのような少年漫画。業界を取り巻くその雰囲気に無頓着でいられる人は、仮にアマチュアだったとしても多くないはずです。絵柄も、ある範囲内で規定されている感が否めませんし、作風が時代に合わず苦しい思いをしている作者さんもいるのではないでしょうか。

アニメ、ゲームは更に制限が大きくなります。商業作品は言うに及ばず、作品としての体を整えること自体の非常にハードルが高い。小説が思い立ったが吉日で気楽に始められるのに比べ、アニメとゲームは製作期間が長いこともあって題材選びや方向性の決定も慎重になりがちです。慎重になる、ということは安牌を選びやすいということでもありますから、「本当にやりたいこと」より「できそうなこと」を選んでしまい、結果として自由な方向性の決定ができないことがあるのではないでしょうか。複数人が関わっている場合は自分の意見だけをゴリ押しするわけにはいかないので、余計にそうでしょう。

小説は前述のコストの低さもあり、比較的挑戦的に作品を作ることができます。短編でしたら早ければ二～三時間で書けてしまいますから、仮に失敗してもダメージは小さく済むわけです。

理由その三。小説は発表の場に恵まれている。

ここ、小説家になろうを始め小説の発表の場はネットの普及によって大幅に拡大しました。文字を表現媒体としているので大長編になってもアクセスが容易で、携帯端末からも無理なく読めてしまう。

創作者にとって受け手の存在は非常に大きいと思います。手元に置いておくのとこうやってネットに公開するのとでは書くモチベーションが全く違います。

小説を書くのが孤独で崇高だというのは今や昔の話です。今の小説書きはそのような苦行に耐える必要は最早ないのです。

以上三点から私は「小説を書くことは別にすごくなんかないよ」と主張するわけです。誰にでもできるし、好きなことできるし、簡単に発表もできるし。こんなに気楽な創作活動なかなかないです。

とはいえ。誰にでもできるからこそ、好きなことができるからこそ、簡単に発表ができるからこそ生まれてくる問題もあるわけで。私を含め、多くの作者さんが感じているであろう不満は実のところ小説の気楽さに起因するのです。

まず、誰にでもできる、というこの点。それはつまり技量差が出にくいということでもあります。絵で言うところのデッサン力、音楽で言うところの演奏力。それらは素人と経験者では天と地以上の差があります。しかし、文章という一般人でもある程度は習熟を余儀なくされるもので勝負をする小説は、前述の二つと比べ差が見えづらい。つまり、ある程度やっている人間とそうでない人間の間に絶対的な差があまり存在しないのです。

私は小説を書き始めてそろそろ十年近いですが、未だに自分の文章は素人臭いと思いますし、小説を始めて半年かそこらの子たちと比べても圧倒的アドバンテージを得ているとは言えない。

成長の跡が見えづらいというのは、何かを続ける上で大きなマイナスです。現状に満足することが良いとは言いませんが、昔と比べてむしろ劣っているのではないかという疑心暗鬼に陥ることは精神衛生上よろしくないです。

次に好きなことができる、という点。

母親が「何が食べたい？」と聞いてくる時「なんでもいいよ」と答え「何でもいいが一番困るのよ」と軽く怒られる。非常にテンプレート的な会話ですが、これって案外日常会話でも使ったりします

よね。友達と外食する時に「なに食いたい？」「なんでもいいよ」「じゃあなに食べるかな」と、何でもいい状態って意外に困ります。いっそのこと方向性を決めてくれれば楽なのに。

現社的に言うと“自由からの逃走”とでも呼ぶべきこの状況、一昔前に流行った婚活ブームは自由という強制に疲れた現代人の心の表出なのだろうと思ったりもします。

色々と例を挙げましたが、自由って必ずしもいいものじゃないよねということです。

自由って実は結構生きづらいのです。多くの人が高校から大学に上がった時に感じるであろう「唯一無二の答えがある安心感の喪失」は自由そのものですから。

小説を書いていても「この方向性でいいんだろうか？」という疑問は常に付きまといますし、小説の場合、書き手は自由でも読み手の多くが色眼鏡をかけていたりするので実際はそれほど表現の幅がなかったりと上げて落とすを地で行く部分もよくあります。

自由をちらつかせておいて実は自由なんてなかった。その落胆と閉塞感に筆を折る作者さんも案外多いのではないでしょうか。

そして最後、簡単に発表ができる、という点。

これは実に単純です。母数が大きくなりすぎて発表しても埋もれてしまう作品が出てきて、発表しようとしまいと殆ど差がないという現象が起こる。ここでもそれは顕著ですね。ある程度名前が売れてこないと見てすらもらえない。

その未分類性から正当な評価を受けづらい（誤った読み方をされがちな）傾向にある小説。力作が誰にも読まれずに埋もれていくのを見ると、作者でなくとも悲しい気持ちになります。生みの親なら言わずもがなでしょう。

以上の三重苦が小説にはつきまといます。ですから、小説を書く

ことは比較的容易でも小説を書き続けるのは中々難しかったりします。連射可能なだけに弾切れも起こしやすいですし、慣れれば慣れるほど情熱は減退していく。そして目ばかりが良くなって、他人の作品にケチだけつけて自分は何も書かなくなる。それが小説家志望の末路として最も多いのではないかと思います。

まぁ、小説に限らず多かれ少なかれ創作ってそういうものですからね。商品価値の評価は消費者の側に委ねられ、どれだけ時間と労力をかけようと「いらない」と言われればそれまでなのですし、逆に投げやりでテキトーに書いても「もっとちょうだい！」と言われることもある。

筒井康隆先生が『時をかける少女』を代表作とされるのに憤慨されている話は有名ですが、大作家ですらそうなのだから正当な評価なんて求めるだけ無駄なんでしょうね。

小説を書くことは特別なことじゃない。けれど、小説を書き続けるには忍耐や反骨心、そして何より小説を書くのが好きでないとならない。

私はそれに加えて「羞恥心」を忘れてはならないと常々自分に言い聞かせています。ある価値観を選ぶ時、それは選ばなかった価値観を捨てるということです。自分の主張に酔ってはならない。正論でマイノリティを押しつぶしてはいけない。仮にそれを選ぶのならば恥だけは感じ続けるべきだ、と。

長くなりましたが今回はこの辺りで。

創作をする以上、不満を言い出せばキリがないです。それら全てを飲み込んで創作に昇華させてこそ一流なのではないか。

いつか私もそうなれたらいいなと思いつつ結びの言葉とさせて頂きます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7241y/

うなのなんちゃって創作論

2011年11月21日19時32分発行